

明治三十八年旅順口閉塞船第五群船舶

払下げ関係史料について

——第二回閉塞船福井丸解体引揚げ作業余聞との関連を中心として——

梅 溪 昇

まえがき

日露開戦前より、ロシア旅順艦隊を旅順港内に閉じ込めるべく、当時第一艦隊参謀であつた有馬良橘海軍中佐以下十人の少壮士官が盟約して(『成仁録』という盟約書を作つていた)、港口の閉塞計画を立て、やがて開戦(明治三十七年二月十日宣戦布告)となるや、その直後の二月二十四日、三月二十七日、五月三日の各未明、三回にわたつて閉塞を執行したことは有名である(栗田富太郎『第一回第二回旅順閉塞隊秘話』昭和八年)。三回にわたる閉塞船は計二二隻、閉塞隊員合計三八九人で、なかでも第二回閉塞隊福井丸(二、九四三トン)に乗船の広瀬武夫海軍少佐・杉野孫七上等兵曹の戦死の状況は上聞に達し(『明治天皇紀』第二〇、明治三十七年三月二十九日の条)、いらい「軍神広瀬中佐」(広瀬少佐、杉野上等兵曹とも戦死の前日附で、おのおの海軍中佐、海軍兵曹長に進級)の名で人口に膾炙し、明治四十三年五月二十九日には広瀬中佐、杉野兵曹長の銅像が神田橋畔に立てられた。

ところで、右の閉塞船は戦後どのようなことになつたのであろうか。これに關係する史料が筆者の手許にあり、仮りに

「明治三十八年旅順口閉塞船第五群船舶下げ関係史料」と称するものである。それには(A)海軍艦政本部の許可をえて船舶下げ競争入札に加わった、のちの神戸市高尾造船鉄工所社主高尾要介の旅順口海軍工作廠との契約一件書類と、(B)その契約に基づいて解体引揚作業の現場監督にあたり、これを手始めとして大正・昭和にかけて艦船解撤業などを経営した赤井常吉(高尾要介の甥)の作成した関係資料が含まれている。この種関係史料は、現在の防衛研究所戦史部にもきわめて乏しいとのことであるので、提供された両故人の盛意を重んじて近く同戦史部に寄贈したいと考えている。ついては、これらの史料が、いつ、どのような事情によって個人の筐底から現われ出てきたか、或は経験記録が作成されるに至ったかを明かにしておく必要があると考える。この経緯は広瀬中佐・杉野兵曹長の第二回閉塞船福井丸の解体引揚作業の余聞に関係するものであるので、まずその辺から説明に入ろう。

一、昭和九、十年の軍神広瀬中佐の遺品、杉野兵曹長の

遺骨関係新聞記事について

昭和九、十年は、明治三十七、八年より数えて、いらい三十年、丁度日露戦争三十周年にあたり、各新聞社では、当時の準戦時体制から戦時体制へと進む時代的背景のもとで、日露戦争に関する回顧的記事を多く掲載するようになった。

これらのうち、まず本小論に関係する広瀬中佐関係記事から示すことにする。

(一) 広瀬中佐遺品関係記事

(1)「旅順閉塞船漸くに浮び揚る、誉れの煙突、住吉公園に三十年の雨曝し」(「大阪時事新報」、昭和九年一月十五日付)

「広瀬中佐が第二回（第一回の誤り―筆者註、以下同じ）閉塞船に使用した第三報国丸の思ひ出深き煙突が三十年来大阪住吉公園内の高灯籠前の路傍に雨ざらしになってゐたのが、この程西成区粉浜町粉浜第一教化委員間で問題となり由緒ある記念物として更生することゝなつた。（中略）この煙突は日露戦役後凱旋の後、当時旅順港掃海作業に従事していた住吉公園前もと茶屋こと今戸吉次郎氏がこの煙突と共に第三回（第二回の誤り）閉塞に広瀬中佐が福井丸の防弾装置鉄板に自ら白ペンキで「決死隊」の三文字を書遺したのを最後に名譽の戦死を遂げたその絶筆の鉄板とを持ち帰り住吉神社に寄贈した」云々とある。

(2) 「軍神広瀬中佐を偲ぶ尊い遺品が雨ざらし、旅順閉塞船報国丸のマスツ保存運動起きる」（「大阪毎日新聞」昭和九年一月二十五日付）

「（前畧）このマスツは日露閉戦後沈没艦船の払下をうけた西区立売堀解体業故原田利兵衛氏が引揚げたうちから広瀬中佐ゆかりのある報国丸のマスツと同中佐の絶筆となつた第三回（第二回の誤り）閉塞船福井丸の舳の部に「決死隊」と記した鉄板を船主西区江之子島、右近権左衛門氏にゆかりのある住吉神社に奉納せんと今戸吉次郎氏などの斡旋で運んだものであるが、同神社では鉄板だけは境内の一隅に一時安置したが最近の境内改修に際して取除き倉庫の一隅で塵にまみれ、マスツの一部はそのまゝ雨露にさらされてゐた」云々。さきの「大阪時事新報」が「煙突」としているのは誤りで、本紙にあるようにそれは「マスツ」で、その「長さ六メートル、直径六〇センチ」と記されている。

(3) 「奇しき話題、広瀬中佐と三十年、塵中から春陽下へ、蘇へる軍神の絶筆、雄渾、決死隊、輝く報国丸（福井丸の誤り）の鉄板、住吉神社の庫で発見」（「大阪時事新報」昭和九年三月十三日付）

「海軍当局は来る二十七日は広瀬中佐戦役三十周年忌に当るので、同中佐に関する資料を全国的に蒐集、調査すると共に、当日は大記念祭を執行する準備を進め、海軍本省出仕早川中佐が来阪、住吉神社の倉庫内で、決死

隊」と大書された同中佐の絶筆の鉄板が発見された。」なお、「指揮官広瀬中佐は、その死への首途に際して閉塞船福井丸にあって雄渾なる絶筆を認めた、曰く「決死隊」——大鉄板にペンキの跡も鮮かに記された二尺四方余の三文字は如何ばかり乗組員の士気を鼓舞せしめたことだろう。」と記し、倉庫内の写真を入れて、「写真×印はその鉄板」と説明している。

この記事は、(1)(2)の記事をふまえて、海軍省当局が調査に乗り出したものであろう。

(二) 杉野兵曹長遺骨関係記事

以上のように、日露戦争三十周年記念でその回顧談が紙面に連載されるころ、杉野兵曹長の遺骨に関する次のことき記事があらわれた。

(1) 「日露役秘話、如来院に眠る決死隊の勇士、閉塞船を引揚げた高尾鉄工所主らが納骨」(「大阪毎日新聞」昭和十年三月十二日—整理スタンプ)

「神戸市葺合区吾妻通三丁目十六高尾鉄工所では戦後、広瀬中佐と杉野兵曹長との話で名高い福井丸をはじめ旅順口の閉塞船天津丸、愛国丸、江戸丸の四隻を引揚げたが、その際黄金山砲台の真下の暗礁にのし上げてゐた福井丸の鱧の右舷に四尺に八尺くらゐの鉄板に白ペンキで「決死隊」の字が鮮かに書かれてあるのを発見、同鉄工所の先代高尾要蔵(介の誤り)氏は早速持帰って大阪市官幣大社住吉神社に奉納し現在でも希望者の参観に供してゐる。また当時の潜水夫寄木庄太郎(五六)——現在神戸市兵庫区海事工業経営者——が福井丸その他の船底から頭、腕、肋骨、足等チリ／＼になった白骨を発見、一部分は旅順鎮守府に納め残部は桐箱に入れて尼崎市の如来院でねんごろに葬った。(中略)当時先代とともに引揚事業に携った同鉄工所長高尾猪之介、重役福田伝次郎両氏はこもこも語る、福井丸から出た白骨は杉野兵曹長の骨に相違ないと当時旅順鎮守府でもいってゐました、死

んだ父は余ほど感慨深かったと見えてあの引揚事業ばかりは後まで」云々と記して、如来院にある納骨箱の写真を掲載している。

以上の新聞報道記事はいずれも当時関係者の談話を記事にしたものであるが、これらを立証する何らかの文献史料が存在しているであろうか。筆者の管見に触れたものをまず提示する。

二、西村天囚の「決死隊鉄版記」について

それは、大阪朝日にあつて文名の高かつた西村天囚の文集である「碩園先生文集」巻二に収められている、つぎの「決死隊鉄版記」（壬子）である。

甲子之役海軍攻旅順以閉塞隊為尤烈閉塞隊者夜放汽船數隻潛入海口裝藥爆沈以塞水路令敵艦不便出入敵則懸灯照海一見船至千礮齊發不覆溺則轟斃進退兩難故又名決死隊當時軍中募敢死之士慨然願往者不可勝數而広瀬中佐武夫為其指揮官者再初乘報国丸沈之而還後乘福井丸以三月二十六日入旅順口時天未曉月色微茫敵初不覺既而砲彈雨下我船隊冒之進遂抵黃金山下以次爆沈福井丸亦已了事収衆乘輕舟独少杉野兵曹長中佐乃回身上船大呼徧索者再三不得遂巡間中彈而死吁殺身成仁中佐在焉宜矣時人歎仰称軍神也事平後神戸鉄工所高尾要助請于官搜取旅順沈船獲一鉄版於福井丸高三尺長丈余版面有決死隊三大字蓋中佐所自書字如川流嶽峙在海中者久而不蹶不崩非其英靈不昧使然耶豐後児玉定今戸吉次郎与中佐同郷因欲伝諸久遠大阪右近權右衛門本為福井丸船主与同志謀捐資協助於是建亭於摂津墨江祠側掲鉄版於其上請予叙来由夫赴義樂死国民之性為然而中佐之忠勇与死士之壮烈自発露于鉄版之表顧鉄版之所以出自海中者安知非天仮此一物以激厲後人欲使其繼而興起哉予深喜斯拳之有関于風教乃忘其陋而記之明治四十五年五月

これを読むと、(一)本鉄板は神戸鉄工所主高尾要助(介)が閉塞船福井丸より獲たもので、高さ三尺、長さ一丈余あ

ること。(一)その「決死隊」の三文字は、おそらく広瀬中佐の自筆で、筆勢が頗るよいこと。(二)中佐の英霊を永く顕彰しようと、中佐と同郷の豊後の人、児玉定・今戸吉次郎が力を致したこと。(四)福井丸の船主大阪の右近権右衛門が同志を謀って資金を集め、住吉神社に建亭して、この鉄板を掲げ、その来由を天囚に依頼したこと。(五)その時期は、明治四十五年五月であったことがわかる。住吉大社が選ばれたのは、今戸吉次郎らが同社に近く関係が深かったほかに、何よりも同社の祭神が海の神であり、かつ軍神とされていたことが要因であろう。かつて、述べたように、このころ天囚は教育勅語に拠り儒教的国家主義の立場に立って儒教道德の復興運動につとめていたから(拙稿「懷徳堂と西村時彦(天囚)」、『季刊日本思想史』二〇)、請われてこの「決死隊鉄版記」を書いたのもうなずける。

右によって、前項にとりあげた住吉神社の広瀬中佐の遺品中、「マスト」はともかく、「鉄板」が、同神社に納められたとする新聞記事の内容・経緯が一層具体的となり、各関係者についても明瞭となったとすることができる。

しかしながら最近筆者が同社を調査したところでは、報国丸の「マスト」は昭和九年五月二十七日の海軍記念日当日、住吉公園より同神社境内反橋北側に運ばれ(運搬中の写真も掲載)、記念塔として建立するための地鎮祭が行われたと報じられているが(「大阪朝日新聞」昭和九年五月二十八日付)、今日所在は不明であり、かつ「鉄板」の所在も奥野寿茂宮司のお話によると確認できない由である。おそらく戦中戦後の混乱によって行方がわからなくなったと思われる。しかし、「決死隊」の三文字が、白ペンキであったとするのは、さきの「大阪時事新報」昭和九年三月十三日付記事であるが、のちに触れるように、引揚解体の現場監督であった赤井常吉談では、「黒ペンキ」とされているなど、喰い違いもあり、今後とも神社側の探查をお願いしたい。

三、如来院の杉野兵曹長遺骨をめぐる証言について—(A)(B)両史料の出現

前項において、昭和十年の如来院の杉野兵曹長遺骨記事について記したが、その後この問題は余り世間で取り上げ

られなかった。しかし、その後、いわゆる「太平洋戦争」勃発後の昭和十七年十一月十六日付の「大阪毎日新聞」が「杉野兵曹長の宝塔 遺骨眠る尼崎の如来院に建立」と題する計画記事をのせてから、世人の注目を惹くことになった。やがて翌十八年三月、尼崎史談会は、恰も旅順閉塞四十年に当たるとして、海軍協会尼崎支部と共同主催して如来院において三月二十八日法会を執行することとし、「尼崎如来院奉祀旅順閉塞決死隊御遺骨由来記」を作成し、そこにつぎのごとき高尾要介嗣子高尾猪之介（神戸市灘区大石東町）、赤井常吉（西宮市甲陽園）両氏の談話を掲載した。

赤井常吉氏（大阪伸鉄解船聯盟理事長、株式会社赤井商店社長）
「明治三十九年五月、旅順港口黄金山下に坐礁せる福井丸上甲板の仮事務室で執務中、丁度昼飯前のことでした、潜水夫故畠山善七が同船の機関部から腐った布の塊様のものを持って浮き上って来ましたので能く点検しましたところ紛れもない人骨が出て参りました。私は之は確かに決死隊員の御骨に相違ないと直感致しましたので、直ちに潜水夫を集め各船に於てそれらしきものを発見したら一物も逸せず持つて来る様に厳達致しました。

それから愛国丸からも続々と出て参りましたから一々清水で洗ひ引揚げ船名を布裂に自記し御骨に添付して木箱に納め私の室に安置して、同年七月遺骨の大部を白玉山上忠霊塔に奉納し一部を神戸市の高尾家に送り届けたのでした。後同家では如来院に納め御回向を頼んだものであります。

又福井丸の機関部から短剣も引揚げましたが、之は私宅に大切に保存して居りましたのに残念なことに見当りません。今にして考へますと福井丸の機関部から取出した御骨と剣とは軍神広瀬中佐殿が身を捨てゝ探された杉野兵曹長殿のものと思はれて感慨に堪へません。尚其当時福井丸上甲板（カイシング）ニ黒ペンキにて『決死隊』と墨蹟鮮かなる鉄板を発見し町重に取脱し高尾家に送りましたが、後陸軍の将星頭官に依り大阪市の官幣大社住吉神社へ記念塔として奉納せられました。」

高尾猪之介氏（株式会社高尾鉄工所社長）

「私は当時三十三歳で父を助けて居りました。引揚げの模様等は赤井氏（尼崎市西大島の人、父要介の甥）の御話の通りで御座います。如来院に奉祀されている御遺骨は旅順閉塞隊勇士のものに相違ありませんが、当時其の誰なるや又御遺族等の住所不明の爲父が前住職梅溪常禪師に御回向を御頼みして納めたものでございます。証拠物件、参考書類等は昭和十三年七月の大洪水に流出逸散しましたが私は右の事実を御証明申します。」

さて、さきの「杉野兵曹長の宝塔」計画記事に先立つ、昭和十七年九月ごろ、郷土史家加藤省吾氏は、如来院奉祀の現状が、「旅順閉塞隊士遺骨」と記した簡粗なる木箱であるのは遺憾であるとして、「奉納塔旅順閉塞船戦死者英霊」厨子（玉虫厨子ニ模ス、今図面あるも略す）を建設して「英魂ヲ慰メ併セテ国民精神作興ノ目標ト致シ度ク」、

「御当局御調査ノ結果杉野兵曹長外殉忠勇士遺骨ナルコトヲ御認メ被下ラバ云々」（「上申案」による）と大阪警備府人事課に働きかけようとして、如来院はじめ高尾猪之介氏らに關係する参考書類の有無を照会するところがあつた。これに対し、高尾猪之介氏は、上記の談話と同様の趣旨（参考書類の流失逸散）を述べ（「返書案」による）、また如来院住職梅溪常嚴は、九月九日付で「別ニ記録等ノ如キモノ最初ヨリ御座ナク明治四拾壹年壹月先住職梅溪常禪在職當時当院檀徒高尾要介（中略）回向ヲ依頼ストテ奉納セラレ今日ニ及ブモノニ相違無御座」（返書写）と回答している。

このような過程の中で、如来院より赤井常吉氏へ照会がなされていたらしく、赤井常吉氏より、昭和十七年九月五日付で如来院主宛に、冒頭に(b)と記した史料が送付され、前記の同氏談話とほぼ同様の「上申書」および自己の「経歴書」が含まれていた。この「上申書」は、年月日を欠くが、その記載内容から「経歴書」と照合して、昭和十六年四月以降のもので、おそらく昭和十七年九月はじめに成つたもので大阪警備府への提出を予想して記されたものである。それでは冒頭に記した(A)史料は如何。この(A)史料は「高尾造船鉄工所」の封筒に収められ、上書きの「五群松下契約書及艦政本部許可書写も在中、青島ノ許可書モ在中 大正四年三月九日」は高尾要介自筆と認められる。さきに嗣子猪之介氏が、述べているように、参考書類の一切は昭和十三年の大洪水によって流出逸散したとしているから、

本書類は、洪水当時高尾家にはなく、何等かの事情で赤井常吉氏の手許にあり、推定ではあるが、加藤省吾氏の運動（結局、実現せず）との関連において、赤井常吉氏より、みずからの(B)史料と相前後して如来院住職梅溪常巖に提供されたものと思われるのである。

あとがき

以上、(A)(B)史料出現の由来について述べてきたが、要するに第一回閉塞船報国丸、第二回閉塞船福井丸解体引揚作業余聞ともいべき遺品・遺骨の奉納問題が、いわゆる「太平洋戦争」下における戦意高揚のためにクローズ・アッブされて来たことを契機に、高尾・赤井両氏の証言を裏付けるかたちで、陽の目をみるに至ったものである。なお、別の見地からは(A)史料は、未だ全貌が明かでない日露戦争終結後の旅順口沈没船舶の払下げ手続き、契約の内容等を明かにする貴重な史料であり、かつ(B)史料は今後この種艦船解撤業なるもの発展過程を明かにし、第一次世界大戦を契機とするいわゆる「船成金」出現の歴史的背景を考えるうえで重要な歴史的意義をもつといえよう。ここに小論の附録としてこれらの史料を紹介する所以である。

終りに、大阪住吉大社宮司奥野茂寿氏より、筆者の調査（一九八九年六月一日）にさいして、御多忙中にもかかわらず、同社所蔵の新聞記事切抜帖その他を提示されたほか、種々のご教示を頂いたことを附記して、衷心感謝の意を表する次第である。

なお、以上の各新聞記事は、すべて右の同大社の切抜帖によったが、「大阪毎日新聞」昭和十年三月十二日（整理スタンプ）に関しては、文中「来る十日の陸軍記念日には」としており、日付に疑問があり検討を試みたが、阪神版と市内版のちがいか毎日新聞（大阪）マイクロフィルムでは確認できていない。他はすべて確認済である。

(A) 高尾要介関係資料

(高尾要介自筆墨書)

五群松下契約書及
艦政本部許可書写も在中
青島ノ許可書も在中
大正四年三月九日

(表)

(23センチ×9センチ)

神戸市葺合吾妻通三丁目

高尾造船鉄工所

長電話(三ノ宮)七四番

大正 年 月 日

(裏)

以下の諸資料は右封筒に一括収納されている。

① (艦政本部許可書写)

第三号

證明書

高尾要介

右ハ旅順口港外四ヶ所沈没船舶松下競争

入札ニ加入スルノ資格アルモノト認メ證明ス

明治三十八年五月廿六日付

海軍艦政本部長 伊集院五郎團

福井丸、江戸丸、愛国丸、遠江丸、ハイラル号

(高尾造船鉄工所用箋、高尾要介自筆ペン書)

② (松下入札期日通知書)

〔ゴチのみ墨書、他は
ガリ版刷りである。〕

旅廠公第壹貳号

本月十三日午後一時卅分当廠内ニ於テ沈没船舶松下競争

入札執行候条此段及通知候也

但代理者入札ノトキハ相当委任状提出ノコト

入札保証金ハ同時刻卅分前迄ニ提出ノコト

明治三十八年七月十日

旅順口海軍工作廠

高尾要介殿

③（契約保証金上納書控）

契約保証金上納書

第五群 五隻

右落札金高貳万六千六百六拾參円也

此契約保証金參千壹百円也

内訳

公債額面四千円也

五分利公債

へ号第四六參番 全 四六四番 全 四六五番

全 四六六番 全 四六七番 全 四六八番

五百円券六枚

軍事公債 以号第壹五五參七番 全 五參四四一

全 五參四四〇番 全 五九九七八番

路号第七四貳〇五番 全 九貳八六番

全 六〇〇九參貳番 全 壹貳參七六八番

波号第參參七六貳番 壹百円券九枚

国庫債券 波号壹〇八壹五番 百円券壹枚

右上納仕候也

明治三十八年七月十五日

神戸市葺合吾妻通三丁目十六番地

高尾 要 介

旅順口海軍工作廠長

（次）
黒井 悌二郎殿

（広島、平尾本店用紙、一丁、全文墨書）

④（旅順口閉塞船五群五艘売却契約書）

旅順口閉塞船五群

五艘売却契約書

契約人

高尾 要 介

〔ゴチの部分のみ墨書、他はすべて
「ガリ版刷りである。表紙共四丁。〕

船舶売却契約書

一 第五群船舶 五隻

此買受代金 貳萬六千六百六拾參円也

旅順口海軍工作廠長黒井悌次郎ハ旅順口港内ニ沈没セ
ル第五群ノ船体機関等ヲ高尾要介ニ売却スルニ付旅順

明治三十八年旅順口閉塞船第五群船舶払下げ関係史料について

口海軍工作廠長黒井悌次郎ヲ甲トシ高尾要介ヲ乙トシ
契約スル条項左ノ如シ

第一条 乙ハ本契約ノ履行ヲ担保スル為メ保証金トシ

テ中央金庫 五分利公債証書 額面參千円也
旅順口派出所ノ 軍事公債証書 額面九百円也 ニ対

スル保管証書第七号ヲ納付シ置キ契約履行後之レヲ
還付スルモノトス

第二条 乙ハ本契約締結ト同時ニ旅順口海軍主計部長

ノ告知ニ從ヒ買受代金ヲ納附スヘシ若シ其ノ期日内
ニ之ヲ納附セサルトキハ甲ハ契約ヲ解除シ契約保証
金ハ官ニ所得スルコトアルヘシ

第三条 乙ハ代金納附ノ日ヨリ六十日以内ニ引揚ケニ着
手シ契約締結ノ日ヨリ拾八ヶ月以内ニ悉皆引揚ヲ結
了シ且之ヲ旅順港外甲ノ指定スル地域以外ニ搬移ス
ルノ義務アルモノトス

第四条 乙ハ契約締結ノ当日ヨリ拾四日以内ニ事業ノ順
序書ヲ作り甲ノ承諾ヲ受クヘシ事業ノ進行後更ラニ
之ヲ變更スル必要アルトキ亦タ同シ

第五条 甲ハ随時吏員ヲ派シ事業ヲ監督セシムルコトア
ルヘシ乙ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第六条 乙ハ船体及機關ノ全部又ハ一部ニシテ之ヲ水

中ヨリ引揚タルモノニ対シテハ同時ニ所有權ヲ取得
スヘシト雖トモ兵器ニアリテハ特ニ甲ノ承認ヲ經タ
ルモノヲ除ク外ハ総テ之ヲ官ニ納附スルモノトス

第七条 乙ハ引揚ヲ終了シタルトキハ之ヲ甲ニ届ケ出
テ其検査ヲ受クルモノトス若シ殘存セル物件アルトキ
ハ甲ハ更ラニ之カ引揚ヲ命スルモノトス

第八条 乙ニ於テ不可抗力其他正當ノ事由ニ因ルニア
ラスシテ第三条ノ期間内ニ其義務ヲ完了セサルトキ
ハ延滞日数一日毎ニ買受代金ノ貳百分壹ニ相当スル
違約金ヲ徴収セラルルモノトス若シ延滞日数延テ六
拾日ニ及フトキハ甲ハ本契約ヲ解除スルコトアルヘ
シ

第九条 甲ニ於テ前条ニ依リ契約ヲ解除シタル場合ハ
契約保証金ハ官ノ所得トシ且買受代金ハ之ヲ還付セ
サルモノトス

第十条 第八条ノ延滞違約金ハ旅順口海軍主計部長ノ
告知シタル期日内ニ之ヲ納付スルモノトス若シ乙ニ
於テ之ヲ怠ルトキハ旅順口海軍主計部長ハ契約保証

金ヲ以テ之ニ充ツ尚ホ不足アルトキハ乙ヲシテ更ラ
ニ之ヲ納附セシムルモノトス

第十一条 保証人ハ乙ノ死亡若クハ失踪其他ノ事故ニ

ヨリ本契約ノ義務ヲ履行スルコト能ハサルニ至リタ
ルトキハ乙ト同一ノ資格ヲ有スルモノヲ撰ミ甲ノ承
諾ヲ得テ本契約ノ履行ヲ継承セシムルモノトス

第十二条 保証人ハ前条ノ外違約金其他乙カ甲ニ加ヘ
タル損害ニ関シテハ乙ト連帯シテ一切ノ責ニ任スル
モノトス

第十三条 甲ニ於テ違約金ヲ徴収スル場合ハ錢位未滿
ノ端數ハ之レヲ切捨ツルモノトス

第十四条 前各条ノ外ハ明治二十九年海軍省告示第三
号物品購買売却規則ニ依ルモノトス

右契約ヲ証スル為メ本書式通ヲ作り各自壹通ヲ保有スル
モノ也

明治三十八年七月拾五日

旅順口海軍工作廠長 黒井 悌次郎 印

神戸市葺合吾妻通三丁目十六番地

当時旅順口八嶋町参番地

明治三十八年旅順口閉塞船第五群船舶払下げ関係史料について

高尾 要介 ㊦

広島県塚本町十五番地

当時旅順口八嶋町三番地

保証人 平尾 雅次郎 ㊦

⑤ (類収証書)

書 証 収 領	
第一四号	旅順口海軍主計部
神戸市葺合吾妻通三丁目十六番地 高尾 要介 納	一金貳萬六百六拾三圓也 但旅順口外沈没船舶第五群五隻払下代 右領収候也 明治卅八年八月二日 廣島本金庫圖

⑥ (青島港内沈没艦船払下入札加名願控)

青島港内沈没艦船松下入札加名願

兵庫縣神戸市葺合吾妻通三丁目三番地

造船鉄工業 高尾 要介

私儀

艦本第一〇六四号

証 明 書

兵庫縣神戸市葺合吾妻通三丁目三番地

造船鉄工業 高尾 要介

今般臨時青島要港部ヨリ御布告相成候同港沈没艦船松下ケノ入札ニ加入仕度海軍省第五号ノ資格ニ関シテハ前キニ明治三十八年五月廿六日附ケヲ以テ旅順口港外沈没船

松下競争入札ニ加入ノ御許可ヲ蒙リ該入札ニ際シ第五群船舶五隻之松下ケヲ相受ケ候ト最近大正三年六月十五日舞鶴海軍工廠ニ於ケル駆逐艦御松下ケニ際シ入札加名ノ御許可モ蒙リ候次第營業及納税等ハ爾來繼續仕居候間何卒特別ノ御詮議ヲ以テ入札加名ノ義御許可被成下度別紙營業納税証明書相添此段奉願上候

大正四年二月 日 右高尾 要介

海軍省艦政本部長

村上 格 一殿

(神戸高尾鉄工所用紙)

⑦ (同競争入札加入資格証明書)

「艦本第一〇六四号」海軍艦政本部長村上格一殿のミゴム印、他はすべてペン書

右者明治三十八年四月海軍省令第五号ノ資格ヲ具備シ青島港沈没艦船第二号買受ノ競争入札ニ加入ノ資格アルコトヲ証明ス

大正四年三月六日

海軍艦政本部長 村上 格 一 閣

(B) 赤井常吉関係資料

以下の各資料は、書翰と共に全封して「尼崎市寺町如来院主」宛送付されたるもの(消印は昭和十七年九月六日付)

大阪市西区北堀江二番町二七(千代崎橋東詰)

鉄船業
新古レー
艦船解撤業

「商標略」
(菱ノ中ニ)
赤ノ字

株式 赤井商店
会社 赤井商店
電話新町 五五一二番
五六一七番
六六九〇番

昭和十七年九月五日

赤井 常吉

(封筒裏)

20.5センチ×8.2センチ

① (赤井常吉如来院主宛書翰)

拝啓益々御情栄之段奉大賀候

陳者過日御来駕被下候節は何の風情もなく誠に失礼仕候就而其の際御話申上候其の当時の概歴を記載したる上申書並に小生の経歴書茲許全封御送附申上候間貴着御一覽被下度候写真は目下大至急にて焼増致させ居候間出来上り次第御送附可致候

先は右要用迄申上度如斯御座候

敬具

昭和十七年九月五日

赤井常吉

如来院主殿

(赤井商店用箋、カーボン複写、
写真は発見できず。)

② (赤井常吉上申書)

上申書

明治三十七八年日露戦争当時旅順港閉塞決死隊広瀬中佐ノ指揮ノ基ニ決行セシ旅順港口黄金山下海岸ニ坐州沈没セシ福井丸及其他港外湾口ニ閉塞沈没セシ愛国丸外三隻ヲ拙者叔父故高尾要介カ明治三十八年八、九月頃政府ヨリ払下ヲ受ケ引揚準備ノ為メ全年十月現場調査ヲナシ翌

三十九年四月ヨリ引揚ニ着手セリ 拙者ハ其ノ引揚ノ現場総監督ヲ成シ居レリ 当時福井丸ハ坐州沈没シ中甲板迄海水来ル状態ナリシ為一時上甲板上表船首樓船室内ヲ事務所及作業員ノ宿泊所ニ当テ拙者モ共ニ寝起ナシ作業ヲ開始セリ 凡ソ一般引揚作業ハ第一ニ機関場ヨリ取掛ルヲ常トセリ 此ノ福井丸モ例ノ通り機関場ヨリ着手セリ然ルニ全年五月頃拙者監督中潜水夫故畠田善七カ機関場潜水水中十一時半頃昼食前ニ水中ヨリ揚リ来タリタル時手ニ布ノ腐リタル様ナ物ト共ニ人骨ラシキモノヲ持チ浮キ揚リ来タリ早速克ク見覽セシニ人骨ニ相違ナク之レ即チ決死隊員ノ骨ニ相違ナキヲ以テ丁重ニナシ自分ノ室ニ祭り置ケリ 右ニ就テ各潜水夫ニ命ジ各閉塞船共人骨ラシキ物ハ丁寧ニ是非共引揚ノ様之レ國ノ為ニ殉ジタ決死隊員諸彦ノ遺靈ニ等シキ貴重ナルモノナレバ其ノ靈ヲ慰メル為各潜水夫ニ引揚方ヲ嚴命セリ其後各潜水夫ハ心シテ注意シタル結果 愛国丸ヨリ人骨続々揚レリ 其ノ當時福井丸ヨリ揚リシモノハ福井丸ヨリ揚リシモノ、愛国丸ヨリ揚リシモノハ愛国丸ヨリ揚リシモノト各々記載シ置キ約二ヶ月後他ノ引揚物ト共ニ汽船便ニテ神戸ニ送附

セリ 神戸着後遺骨ハ其儘高尾家ノ檀家寺尼ケ崎如来院ニ回向ノ上保管方ヲ依頼セリ

其後克ク思考スレバ福井丸ヨリ引揚ゲシ骨ハ之レ正シク

杉野兵曹長殿ノ遺骨ニ相違ナキ事ヲ想起シ今更感慨ニ堪エズ

其ノ後引揚ゲシ骨ハ白玉山忠慰塔ヘ納メタリ

爾来永年引続キ海事工業沈没船引揚事業ヲ経営シ来タリ

今ヨリ貳拾參年以前山口県徳山湾ニ沈没ノ河内艦引揚、

最大難事業ニテ海底ヨリ五十尺泥中ニ沈下ノモノヲ目下

引揚作業中ニテ此ノ艦ヨリモ多数ノ人骨揚リ之レモ丁寧

ニ白箱ニ入レ徳山ノ寺ニ持チ行キ供養シテ壺ニ納メ最終

ニ遺霊祭ヲスル積リナリ

右ノ通り相違無之経歴書相添エ上申候也

(年月日欠)

日本船舶解撤業組合員

赤井常吉[㊤]

(因州十二行野紙二丁、邦文タイプ書類)

大阪市西区北堀江二番町二七番地

赤井常吉[㊤]

明治拾六年參月拾九日生

自明治三十八年
至明治四十一年

旅順閉塞船福井丸以下拾隻及露国軍艦ワリヤーク他五隻解体引揚事業ノ現場

監督兼會計高尾組ノ事業

自明治四十五年
至大正二年三月

大阪ニ於テ軍艦鎮遠解体事業

高尾外唄名ノ共同事業

大正二年四月

上海ニ於テ北勢丸引揚事業高尾ト共同

同 三年

上海ニ於テ新泰号引揚事業(此ノ事業ヨリ独立)

同 四年

北海道ニ於テ大山丸解体引揚事業

同 五年

北海道ニ於テ松丸解体引揚事業

同 六年

秋田県ニ於テ日米丸解体引揚事業

同 六年

青森県尻矢岬ニ於テ越中丸解体引揚事業

同 六年

業 青森県尻矢岬ニ於テ笠間丸解体引揚作

同 六年

業 岩手県種市ニ於テ御物丸解体引揚事件

同 八年

業 岩手県種市ニ於テ御物丸解体引揚事件

③ (赤井常吉経歴書)

経歴書

同 八年

業 岩手県種市ニ於テ御物丸解体引揚事件

同 九年 青森県尻矢岬ニ於テ東洋丸解体引揚事業

業

同 十一年 上海ニ於テ鉄船大ダイター四隻救助引揚作業

揚作業

同 十二年 上海ニ於テ米国特務艦ワールン八九〇

〇マシ
〇解体引揚作業

同 十二年 佐世保ニ於テ神戸製鋼所名義ニテ共同

経営トシテ軍艦鞍馬ノ解体事業ヲ一切

担当責任請負ヲ為シ三ヶ月ノ期限内ニ

成功ス

昭和元年 北海道久遠ニ於テ平安丸解体引揚事業

同 元年 大阪市旭区ニ於テ伸鉄（製鉄）工場経

営ス

同 二年 大阪ニ於テ軍艦橋立解体事業

同 三年マデ 外一、〇〇〇噸以下十二隻解体引揚事

業

同 三年ヨリ 赤井造船部ニ於テ常彦丸ヲ新造シテ以

来船主トナリ船舶業ヲ営ム

同 五年 大阪伸鉄解船聯盟会理事長

同 六年 日本伸鉄（全国）聯合会会長

同 八年 株式会社赤井商店創立、社主トナル

同 十二年 輸入船主会理事長

同 十六年三月迄 其間間接ニ引揚事業ニ携リ居レリ

同 十六年四月 山口県徳山灣ニ沈没セル元軍艦河内艦

引揚許可名義ハ武光一氏ナルモ事業ハ

一切之ヲ引受ケ目下作業中也

右之通相違無之候也

昭和 年 月 日

（みの因州十二行特製、二丁、邦文タイプ）

終りに、右資料に関連して、少しく解説を加えておく。入札者高尾要介と契約を結んだ旅順口海軍工作廠は、明治三十七年八月二十四日（内令三四五）の「旅順口海軍工作廠条例」によって開設を定められたもので、同条例には、

第一条 占領地旅順口ニ海軍工作廠ヲ置ク

第二条 旅順口海軍工作廠ハ旅順口鎮守府ニ属シ工場及船渠等ノ整理、艦船兵器ノ造修並兵器図誌測器及

艦營需品ノ配給ヲ掌ル

(第三条ノ十一條略)

(『海軍制度沿革』卷三)

と決められていた。これより先き、同年八月十六日には第三軍司令官乃木希典、聯合艦隊司令長官東郷平八郎は連名にて旅順開城の勅降書をロシア軍に送ったが、これに対し翌十七日にはロシア旅順要塞司令官ステッセルらは連名にて謝絶し來った。その結果、八月十九日には第三軍の第一回旅順総攻撃が決行されたが成功せず、やがて二〇三高地再攻略をめざして軍命令が発せられたのは八月三十一日のことであつた。かかる時期に、早くも旅順口占領後の一処置として本廠の設置を発令したことが注意を惹くのである。

ついに、翌明治三十八年一月二日日本軍が旅順口を占領すると、さきの「旅順口海軍工作廠條例」が七日より実施をみ、海軍大佐黒井梯次郎が廠長に任命された。黒井工作廠長は、これより先き海軍陸戦重砲隊指揮官として、はやくから旅順口方面に在り、ロシア軍の降伏時には、同方面にあるロシア艦船その他同海軍に属する物件の受領委員であつた。

本廠はいうまでもなく、旧ロシア海軍工廠を接収したものであつて、機械工場・鑄造工場・製罐工場・銅工工場・煉鉄工場・造船工場・船渠・船渠唧筒所・水雷艇船渠・老虎尾造船工場・造兵工場・発電所などをもつ広大なものであつたが、日本軍の放った大小の砲弾で各工場の破壊は著しかった。本廠では、これらの修理よりも「実ニ旅順口ニ於ル沈没露艦ノ如キハ我カ海軍力ヲ増加スル為メニハ無上ノ天恵ト言フヘキモノ」(伊集院海軍軍令部次長)として、同年四月十八日より露艦「アンガール」以下諸艦の引揚に全力をあげ、内地に回航する作業などを始めた。

このようにわが海軍力増強に役立つ沈没艦引揚げ作業は、内地海軍工廠より職工の増派を受けて本廠が直接行つたものであるが(海軍軍令部『極秘明治三十七八年海戦史』第五部卷十八、第七章参照)、それ以外は民間に払下げる方針をとり、競争入札のうえ、引揚げ作業を行わせたものであつた。この民間払下げの全貌および経過を示す資料に以下のごときものがある。

第一回 売却艦船引揚事業現況表

群 四 第				群 三 第				群 二 第		群 一 第			序順下払			
ハ ル ピ ン	三 河 丸	小 樽 丸	弥 彦 丸	シ ル カ	佐 倉 丸	エド ワ ル ド バ レ ー	相 模 丸	千 代 丸	全	泥 受 船	シ ラ チ	朝 顔 丸	仁 川 丸	報 国 丸	船 名	
二、三〇〇	一、一六〇	一、三一〇	卅八年十二月十六日浮揚ニ付除算	一、五一〇	一、五一〇	一、五六〇	一、〇二〇	九〇〇	二七〇	二七〇	二八〇	一、三一五	一、一九〇	一、五八五	船 体 部	
五九五	二三〇	三八〇		二三五	四一〇	四五〇	二二五	一七〇	二三	二三	八五	三八〇	三三、五	三八〇	機 関 部	
二、八九五	一、三九〇	一、六九〇		一、五二五	一九二〇	二、〇一〇	一、二四五	一、〇七〇	二九三	二九三	三六五	一、六九五	一、五二五	一、九六五	計	
七七三、六九				三、五九三、四二				本船以下三隻又ハ浮揚ノ 目途ヲ以テ目下準備中 一一、〇六				四三四、〇五	一四〇、〇二	三九、七六	一二、九二	契約期間内引揚グヘキ重量 九月末日マデ ノ引揚重量
五一〇、五七				九六八、四〇				〇				九三九、九四	森田喜平次	森田喜平次	〇	十月以后予 定引揚重量
四、六九〇、七四				三、二〇八、一八				九三九、九四				森田喜平次	森田喜平次	〇	〇	残重量
林謙吉郎				石井千太郎				森田喜平次				安生順四郎			契 約 人	
藤森英治				入来嘉七郎				森田喜平次				安生順四郎			業 務 担 当 人	

附記

前表ノ売却艦船ハ三十八年七月十三日競争入札ニ付シ同月十五日ヨリ十八日マテノ間ニ孰レモ契約ヲ締結セルモノニシテ履行最終期限ハ十八ヶ月間即チ四十年一月十五日ヨリ同月十八日マテノ間終了スルモノトス

各請負人等ハ契約規定ニ依リ六十日以内即チ三十八年十月

初旬ニハ尽ク事業ニ着手セルモ内地トノ交通不便ナリシ為
メ引揚準備整ハサル中ニ全ク操業シ能ハザル寒冷ノ季節ト
ナリ昨年内ノ成績ハ甚タ微々タルモノナリ而シテ昨年ヨリ
本年九月末日マテノ間ニ本国若クハ支那内地へ搬出ヲ証明
（該証明書ハ内外人ヲ問ハス商取引ノ証憑トナリ又通関其
ノ他ニ於テ自己ノ利益ヲ蒙ルノ効力アル故ニ隠匿ノ嫌ナ

キカ如シ証明方法ハ民政部吏員及工作部職員立会点檢ノ上認定ス——原文二行割——セルモノハ即チ本表掲載ノ通りニシテ尚ホ此ノ他ニ實際引揚ケタルモノ商行爲成立セサルヲ爲メ貯蔵セルモノ及取り外シ品ニシテ直チニ自用ニ供シ居ルモノ等幾分アル可シト雖トモ之等ハ少数ナル可キヲ以テ算入セズ又タ十月以降ノ推定引揚量ハ前後ノ引揚力ニ比例シ算出セリ

落札者タル契約人ニ於テ自ラ作業スルモノハ甚タ少ナシ之
レ多クハ無資格ノ実業者カ単ニ他ノ有資格者ノ名義ヲ借り
タルニ依ル引揚作業ノ組織ハ担当者各独立シテ引揚ニ従事
スルモノナリ

松下ノ各群ハ相接近セルモノヲ一群トシ区画セルモノニシ

テ事業ノ実況モ亦各担当者カ各受持船ヲ一併ニ交互作業シ居ヲ以テ實際区分シ難キニ依リ担当者毎ニ計上セリ

五、将来ノ省察

本表記載ノ如ク松下當時ノ推定重量貳万八千六百七十六噸（シルカ）ノ分千五百二十五噸ヲ除クニ依リ——原二行割）ニ対シ契約期間内ニ引揚ケ得可キ数量壹万貳百叁拾壹噸九三ヲ扣除スルトキハ実ニ壹万八千四百四拾四噸〇七ヲ残留スルモノナリ仮ニ現契約終了后猶ホ一ケ年間延期ヲ許可シ其期間現在ノ引揚力ヲ以テ引揚ヲ継続スルモノトセバ其ノ引揚量約九千六百九拾六噸ニシテ四十一年一月ニ於ケル残量ハ尚八千七百四十八噸〇七トナル可シ依リテ其残量ヲ仮リニ官業ニ掃海スルモノトスレバ概畧左ノ費用ヲ要スベシ

第一 四十一年一月中旬ニ於ケル残量

壹万八千四百四拾噸〇七 一噸ニ付貳拾円ノ見積

此引揚費概算金叁拾六万八千八百八拾壹円四拾銭

第二 四十一年一月中旬ニ於ケル残量

八千七百四拾八噸〇七 一噸ニ付貳拾参円ノ見積

（此期間ニ於ケル残量ハ比較的事业ノ困難ト認メ上申ス）

此引揚費概算金貳拾万〇一千貳百〇五円六拾壹銭

（明治三十七八年戦時書類」卷九二）

第二回 売却艦艇表

松下番号		船種		船名		隻数	落札者
第一号	砲艦	砲艦	(イ)号エルマツク	(イ)号ギリヤーク	二隻	平尾雅次郎	
	砲艦						
第三号	砲艦	砲艦	(イ)号ザビヤカ	(イ)号ボーブル	二隻	橋本辰次郎	
	砲艦						
第三号	砲艦	砲艦	(イ)号デギッド	(イ)号	二隻	同 人	
	砲艦						
第四号	浚渫船	浚渫船	(イ)号	(イ)号ブデチエルヌイ	三隻	橋本喜造	
	浚渫船						
第五号	駆逐艦	駆逐艦	(イ)号ラザレスチー	(イ)号ストロスオイ	二隻	橋本忠次郎	
	駆逐艦						
第六号	汽船	汽船	天津丸	オトワズヌイ	二隻	橋本亀吉	
	汽船						
第七号	駆逐艦	駆逐艦	ウニマテリスイ	ウニマテリスイ	一隻	橋本忠次郎	
第八号	駆逐艦	駆逐艦	ウヌシーテリスイ	ウヌシーテリスイ	一隻	田村与七	
第九号	駆逐艦	駆逐艦	レフテナント・ブラコフ	レフテナント・ブラコフ	一隻	高尾要介	

第十号	水雷敷設船	エニセイ	一隻	江森盛孝
第十一号	汽 船	ノンニー	一隻	同 人
第十二号	巡洋艦	ボヤリン	一隻	田村与七
第十三号	水雷艦	第四十八号艇	一隻	江森盛孝
第十四号	通報隻	宮 古	一隻	田村与七

◎落札者人名ハ六月三十日ノ電話ニヨリ記入ス

備考

一、前各号毎ニ入札ス可シ

二、二隻以上ノモノハ合計価格ヲ以テ落札者ヲ決定ス

但単価ノ明記ヲ要ス

右の「第一回売却艦船引揚事業現況表」は、明治三十九年九月末現在で作成されたものごとくであるが、作業の進捗は全体として緩慢で、現在の引揚力では契約の最終期限である明治四十年一月において一八、四〇〇余トンの残量を生じ、さらに一ケ年期間を延長しても、なお八、七〇〇余トンの残量となるとされ、それぞれの時点において官業をもって引揚げるとすれば、前者の場合では三六万八千余円、後者では二〇万一千余円の費用がかかるかと算定している。実際には、いかなる経過を辿っ

たかは今後の検討に譲ることにするが、とも角、第一、第五群の払下げのうち、高尾要介の第五群が船数のうえでも五隻、その推定重量一〇、三二〇トンと払下量では第一位を占めていたことがわかる。なお、「第二回売却艦船艇表」の中にも高尾要介が「第九号駆逐艦レフテナント・ブラコフ一隻」を落札しているのがわかる。この第二回分の引揚経過についても後考に譲ることにする。右に記した、「旅順口海軍工作廠条例」および「極秘明治三十七八年海戦史」・「明治三十七八年戦時書類」中の関係史料については、防衛庁戦史部所員原剛氏のご教示を得た。記して謝意を表する。